（昭和37年3月12日
第三種郵便物認可）

令和２年２月10日

（第700号）

国民同胞

発行所
公益社団法人　国民文化研究会
（九州←→東京←→全国）
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替　00170-1-60507
電話　03-5468-6230
ＦＡＸ　03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp

月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料　年間2000円

歴代天皇の御製を学ぶ

―後陽成天皇「五節の舞」の御製―

小柳　志乃夫

現在、当会会員の間で、歴代天皇の御製の謹解書を今の世にわかりやすい形で編集しようと、企画準備を進めてゐる。当会の学問の道統の一つは御製研究にあり、小田村寅二郎・小柳陽太郎共編『歴代天皇の御歌』が出版されたのは昭和四十八年のことだった。今回の企画はいはばこの『歴代天皇の御歌』の入門書を作らうといふものである。

初代神武天皇から百二十六代今上天皇に至る天皇方で御製が遺されてゐるのは北朝の五方を含めて九十五方に及ぶ。この壮大な御製群は日本のそれぞれの時代の天皇の大御心を映し出した貴重な文献である。

歴代御製のテーマは、花鳥風月や相聞、挽歌など様々だが、世を思ひ民の生活を思はれる御製が多く、それに重なるやうに神事に関はる御製も目立つ。

宮中の祭祀が天皇の最重要のお務めであることは、昨夏の合宿教室で大岡弘講師が語られたところであった。その神事の中でも最重要とされるのが新嘗祭であるが、次に紹介するのは新嘗祭とともに行はれる豊明節会を詠まれた後陽成天皇（百七代、ご在世一五七一～一六一七）の御製である。

豊明節会

忘れめやとよのあかりに少女子が節会のよるの舞のたもとは

豊明節会は、天皇が新穀を召上り、臣下にも賜ふ祝宴であり、節会では舞姫が「五節の舞」といふ国ぶりの舞を披露した。御代始めの新嘗祭は特に大嘗祭として行はれる重儀で昨年も斎行されたが、豊明節会も「大饗の儀」といふ名で行はれ、「五節の舞」が披露されたときく。

このめでたい舞を後陽成天皇が「忘れることがあらうか！豊明節会の夜の宴に見入った少女らの舞の袂は」とその姿を印象深くお詠みになったのである。今回の「大饗の儀」の参列者にも目に浮ぶやうな御製ではあるまいか。

しかし、史実からみると、応仁の乱の少し前から治安悪化によって新嘗祭や大嘗祭は長い間中絶し、その復興は江戸時代の霊元天皇（一一二代）以降に待たねばならなかった（勝岡寛次「大嘗祭の歴史と祈り」『祖国と青年』令和元年七～十月号）。だとすれば、秀吉の時代に重なる後陽成天皇の御製は想像上の歌といふことになる。しかし、御製の印象はまことに鮮明であり、初句の「忘れめや」をどう解するかが問題になる。

この疑問にヒントを得たのは、当会の道統に連なる房内幸成氏の『天朝の御学風』（昭和十九年）の記述であった。小倉百人一首に「天つ風雲の通ひ路ふきとぢよをとめの姿しばしとどめむ」（僧正遍照）といふ、正月のカルタ取りで覚えた歌があるが、この歌の原典の古今集の詞書には「五節舞姫を見てよめる」とあり、豊明節会での歌だと知った。そして和歌の道を深く学ばれた後陽成天皇には「百人一首御抄」といふ注釈のご著作があり、この「天つ風」の歌についても「五節の舞」のいはれを含めて懇切な注をつけてられたのだった。因みに房内氏は後陽成天皇のご学問が近世国学の興隆につながったと指摘されてゐる。

応仁の乱以降長く続く祭祀の断絶の中で歴代天皇はその復興を強く願はれた。百五代後奈良天皇には、同様に中絶してゐた神宮式年遷宮の再興を願はれたと思はれる「**いそのかみふるき茅萱の宮柱たてかふる世に逢はざらめやは**」（「神祇」一五三〇年）の御製がある。応仁の乱から百年を経過し、信長・秀吉の登場によって朝儀再興の兆しが見えるのだが、新嘗祭の復興はその後陽成天皇の時代からさらに百年余りの時を要した。

後陽成天皇の御製の「忘れめや」の初句には、天皇御自身の和歌のご学問を背景とした深い懐古の情と、代々継承されてきた神事復興の強いご意志が込められてゐると思はれ、その御心が印象鮮明の御製を生んだのであらう。

以上、今回の作業中のエピソードの一つをご紹介したが、歴代天皇の御製の拝誦を通じて、各時代を生きられたそれぞれの天皇方の御心の動きを我々自身が感ずる道が開かれてゐる。天皇のご事績や時代の空気も蘇りうるのである。

天皇と国語が一貫する、日本の稀有の国柄の幸を改めて思ふ。

（元日本興業銀行）